

伝え合い) する中で、感じ、気付き、考え、大切にすることができるようになると言える。動物飼育は、人と動物とのコミュニケーションである。一ウサギがだけた。はじめてだけた。ぎゅっとだいたら、どきどきしてた。そっとだいたら、からだをくっつけた。ー

子どもが、初めてウサギが抱けた喜びをこのように表現した。子どもはウサギとコミュニケーションしたのだ。

かわいいウサギ。抱っこしてみたい。逃げないで。怖くしないからね。かわいいよ。でも、どうしてそんなに怖がっているの。こんなに大好きなのに。仲良しになりたいのに。抱っここの仕方が悪いのかな。・・・・

「ウサギを抱っこする」という行為は、子どもがウサギに直接働きかけることを意味する。それに対するウサギの反応は、働きかけた子どもにとっては、ウサギから働き返されたことを意味する。子どもは、それを受け止めて、新たな働きかけをする。そうした、子どもとウサギとのやり取りが、すなわち、コミュニケーションである。それは、言語だけでなく、子どもの身体の振る舞いを通して行われる。子どもは、「抱っこする」という行為を核にして、ウサギとコミュニケーションしながら、ウサギに生命のあることを感じ、気付き、考え、ウサギを大切にする抱き方を身に付けた。

動物飼育では、子どもと動物との互恵的な関係が生まれるようにすることが大切である。すなわち、自分の動物に対する振る舞いが望ましいものになるにつれて、動物が自分についてくる。また、動物が自分についてくれば、自分の動物に対する振る舞いが一層望ましいものになっていく。自分が変容すれば、動物が変容する。動物が変容すれば、自分が変容する。こうした互恵的な関係が創り出せるようにするのである。

生命を大切にする教育では、コミュニケーションを大切にしたい。生命は孤独感に対して非力である。孤独にされた生命は弱くて脆い。生命は自己及び他者とコミュニケーションする中で、たくましく瑞々しくなる。すなわち、コミュニケーション力やコミュニケーションできる対象を持つことは、その対象を大切にするとともに、子ども自身の生命を強くたくましくし、子どもの成長にとって大切である。

4 生命を尊重する教育の一層の推進

生命を尊重する教育を一層推進するに当たっては、発生した児童生徒による自他の生命を殺傷する事件の分析などを通して、次のような指摘がされている。

- ①かけがえのない命を大切にする心を育むこと
- ②伝え合う力を高め、望ましい人間関係をつくる力を身に付けること
- ③生きることの素晴らしさを体験活動を通じ実感で生きるようにすること（注2）

(1) 命を大切にする教育

子どもが自他の生命の大切さを実感し、「他人を傷つけない」、「自分を傷つけない」といった基本的な倫理観を踏まえて、生命を尊重した行動がとれるようになる。

具体的には、道徳の指導をはじめ教育課程全体を通じて、自他の生命のかけがえのなさ、誕生の喜び、死の重さ、生きることの尊さ、自信や夢をもって生きることの大切さなどを積極的に取り上げる場や機会を増やす。また、子どもの心に響く教材（「心のノート」を含む）の活用や外部人材の活用等を通して、命を大切にする心を育む教育を充実する。

家庭においても、子どもに命の大切さを実感させることや、基本的生活習慣を身に付けさせることなどについての教育を充実する。

(2) 伝え合う力と望ましい人間関係の指導

自分の気持ちや考えを適切に相手に伝え、生活上の問題を言葉で解決する力を育てると共に、他者を認め互いに尊重し合い、望ましい人間関係を構築できるようにする。

具体的には、学校の様々な教育活動の特質を生かし、お互いの気持ちや考えを伝え合う力を高め、生活上の問題を言葉で解決する力を育てる。また、子どもの社会性を育成し、自制心や自立心、ストレスへの対応力を含む自己指導力やモラルを高める。

(3) 社会性を育む体験活動

効果的な体験活動を通して、生や死に関して現実と虚構の区別ができるようにすることや、他者への献身、奉仕の心、思いやりの心等を育てるようになる。

具体的には、学校における自然体験活動や社会奉仕体験活動などの体験活動を充実させる。また、地域間交流や長期宿泊体験を通して、実際に顔を合わせてコミュニケーションする機会を充実する。

学校の教育課程は各教科等によって構成される。すなわち、生命を各教科等の固有の内容や学習様式の中で学ぶとともに、総合的な学習の時間では、生命を横断的・総合的に学ぶようにすることが大切である。

このような指摘を検討すれば、生命尊重の教育を一層充実するにあたって、動物飼育の有効性が理解できよう。課題は、動物飼育を教育課程のどこに、どのように位置付けるか、ということにな

る。教育課程に位置付かなければ、それは学校の意図的、計画的、組織的な取組みが進まない。

5 小学校教育と動物

(1) 学習指導要領と動物

小学校教育における動物に関する内容や活動を考えるに当たっては、学習指導要領上の位置付けを承知しておく必要がある。実際の学習指導はこれに基づいて、各学校の実態に応じて創意工夫して行われることになる。動物に関しては、主として次のように示されている。

① 「社会（第5学年）」

食糧生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸の働きについて学ぶ。その際、稻作のほか、野菜、果物、畜産物、水産物などの生産の中から一つを取り上げる。

② 「理科（第4、6学年）」

1年を通して数種類の動植物の活動や成長を観察して、それらの活動や成長と季節とのかかわりについての考えをもつようとする。

人及び他の動物を観察したり資料を活用したりして、呼吸、消化、排泄及び循環の働きを調べ、人及び他の動物の体のつくりと働きについての考えをもつようとする。

③ 「生活（第1、2学年）」

動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようとする。

④ 「道徳（全学年）」

動植物に優しい心で接する。生命を大切にする心をもつ。自然や動植物を大切にする。生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。

⑤ 「特別活動（主として高学年）」

主として高学年の全児童がいくつかの委員会に分かれて活動する「委員会活動」があり、例えば「飼育委員会」が動物を飼育する。

⑥ 「総合的な学習の時間」

この時間は、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習などを、地域や学校、児童の実態等に応じ、各学校が創意工夫を生かして実施するようにしたものである。このような趣旨を生かして、この時間では、例えば、地域の農家や獣医師、農業や畜産関係の学校などと連携したり支援を得たりしながら、豚、牛、山羊などの大型動物を飼育している学校もある。

(2) 動物飼育の留意点

子どもが動物と直接かかわることの教育効果が大きい。それとともに、「生き物」である動物を学校で飼育するに当たっての課題も大きい。各学校には、「動物飼育は有効だが課題も大きい」という問題を、創意工夫してどのように両立させていくかが問われる。

① 飼育可能な条件と飼育の覚悟

ある学校を訪問したときのこと。校地の一角に羊の飼育舎が完成していた。教師と子どもで建てたものである。しかし、その飼育舎には羊がいない。

それには、次のような事情があった。子どもが羊を飼うのには、保護者の手助けが必要になる。保護者も、子ども達のために何とか協力してやりたい、と考えている。しかし、安易に引き受けて、中途半端なことはできない。それで今、担任教師と保護者の間で、責任をもって手助けができる体制作りを相談している最中である、というのだった。子どもは、そうした事情を承知して、我慢して待っている。

この動物飼育には、「命を預かる責任を放棄しない」という真剣さがある。子どものために、すぐに動物を借り受けてくれればよい、と考えるのは安直である。動物を飼うことについて、学校、担任教師、保護者、地域の人々が連携して、まず飼育が可能な条件を真剣に考え、それを整える必要がある。

子どもの豊な成長にとって、動物とかかわる体験は重要である。だからといって、子どものために動物を犠牲にするのではなく、命ある存在として、動物に真剣にかかわることが、子どもの豊な成長を実現する。

② 特色ある教育活動と伝統

別の学校では、学年別に飼育栽培に関する教育活動の計画ができている。子ども達は、何年になったらどんな動物を飼育し、そのために何をするか、ということを承知して進級する。

すなわち、この学校の子どもにとって、進級することは、覚悟すること、を意味する。それは辛いことではない。上級生が楽しそうに動物の世話ををする様子を見たり、教師の適切な指導があったりして、○○年生になったら○○の世話ができる、という喜びになる。

動物飼育は、学校の教育計画に基づいて行うことが望まれる。そして、学校の特色ある教育活動として根付かせ、その学校の伝統にする。動物飼育が学校での生活の一部になって、子どもは動物と共に共生・共存する生活の豊かさや楽しさを学ぶのである。

③ 直接体験の学び

教科書や図書などで学ぶ間接体験は、内容が整理されていて学びやすい。また、短時間で多くの内容を学ぶことができる。

一方、直接体験は、直接見たり、聞いたり、触れたりなどして学ぶだけに印象が強い。こうした印象の強さは、対象への子どものかかわりを強くする。特に、直接体験では、対象とのかかわりが広がり深まるにつれて、他人事であったようなことが自分事になっていく。ただ見ているだけでなく、自分もそれにかかわって何かしてみようとするようになる。また、自分と対象が一つになっていく。

子どもと牛とのかかわりでは、次のようなことが観察できる。

子どもが牛舎に近づく。くさい臭いがする。牛はよだれを流しながら干草を食べている。その中で、畜産農家の人が牛の世話をしている。こうした光景を目にした子どもは、『自分が飲んでいる牛乳は、こうした人々のお蔭だな』と感謝する。でも、『自分はこんな大変な仕事はいやだな』と考えてしまうことが多い。

一方、ただ見ているだけでなく、農家の人に促されて、牛の口先に干草を差し出す。牛は大きな

舌を出し、強い力でそれをからめ取り、もぐもぐとおいしそうに食べる。「牛の体をなでてごらん」と促されて、こわごわとだが体を触ってみる。牛はあばれたりもせず悠然と干草を食べている。大きな黒い瞳は、とてもやさしい。「乳を搾ってみますか」と言われ、導かれて牛の乳にさわる。温かくて弾力のある手の感触、いつの間にか、くさい臭いのことも、世話が大変だということも忘れている。牛への愛着が湧いてくる自分を感じる。

各地域には、学校教育を積極的に支援してくれる人々、団体などがある。動物とかかわる体験は、こうした地域の支援を、自律的に、そして積極的に受け入れていくようにしたい。

注1：「命に対する子どもの意識」平成16年11月～12月調査 長崎県教育委員会

注2：「児童生徒の問題行動重点プログラム（最終まとめ）」平成16年10月、文部科学省

本稿をまとめるに当たって、元上越教育大学附属小学校、久保田智恵美教諭、田村学教諭には、資料の提供など多大なご協力をいただいた。謝して御礼を申し上げます。

(前文部科学省主任視学官、文教大学教育学部教授)

